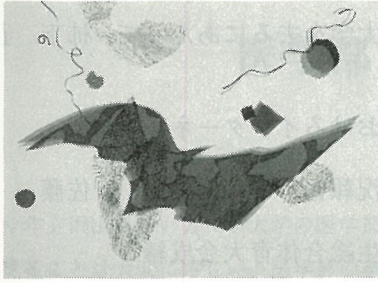


富山医科薬科大学

医学部同窓会報

1996. 第5号



富山医科薬科大学

医学部同窓会会報

1996・第5号

3. 医学部卒業者に寄せる期待 佐々 学
6. 開学20周年記念事業をふりかえって 佐々木 博
8. 校歌、応援歌紹介
11. 開学20周年記念シンポジウム
「今、大学は何をなすべきか」
の議事録 田淵 英一
25. 一寄稿—“21世紀は始まっている” 金岡 祐一
26. 一寄稿—
「シンポジウムに参加して」 佐々木 博
30. 富山医科薬科大学と関連病院長との
懇談会議事要旨
32. 大学および関連病院の
当面の課題と展望 辻 陽雄
36. 一特別寄稿—阪神大震災を振り返り 中野 克俊
37. 「本学における大規模災害時の
医療支援体制」について 片山 喬
39. 「竹林に會す」出版について
40. 竹林に會す—講演集を読んで 谷口 浩和
「本棚のすみ」から 谷川 聖明
41. もう一つの編集後記
—大江健三郎氏の講演の
「竹林に會す」収載断念の顛末— 高田 良久

34. 退官教官寄稿
富山医科薬科大学を去るにあたって 柿下 正雄
42. 一提言—
同窓会活動におけるインターネット 沢 丞
44. 学生自治会現況報告 佐藤 聡
45. 西日本医科学学生総合体育大会成績

自著紹介

28. 循環器病のとらえかた：
眼でみるベッドサイドの病態生理 井上 博
29. 富山医科薬科大学附属病院看護部
より全国へ「新しい看護の発信」 松田 公夫

附属病院短歌俳句の会作品集
邂逅 第三号（綴じこみ）

会員連絡

5. 開学二十周年記念誌購読について
35. 富山医科薬科大学医学会入会のお勧め
46. 短信
48. 人事消息
50. 1995年度富山医科薬科大学医学部
同窓会議事録 沢 丞
52. 平成7年度会計報告・行事報告
平成8年度予算・行事予定 門井 千春
54. 職掌分担
56. 名簿資料収集責任者一覧
66. 同窓会名簿正誤表
75. 会則
80. 原稿募集
79. 編集後記
- 協賛社一覧（巻末）

— 表紙 —

「翔」

木版型押し 91×62cm

作：金子千恵子

立軌会会員

日本版画協会会員

協力：大沢野クリニック

半田豊和（昭和57年卒業）

高野 隆（昭和58年卒業）

医学部卒業者に寄せる期待

笑 福 学 園
国際環境福祉研究所所長 佐 々 学
笑福クリニック理事長

今年も沢山の若い方々が大学の医学部を卒業して社会での医師としての任務と責任を果たしていかれるのを見ることは大変に嬉しい。医学部の卒業者の大部分が臨床医としての修業を重ねてゆかれ、いろんな専門分野ですぐれた医者としての知識と経験を重ねて、病院やクリニックで患者さんの治療に貢献されることは、この人間社会が期待する最も基本的な職務であって、医学部卒業者の過半数がこういう方面に志されることは当然のことと私も考える。

だが、私は現在のように医学部卒業者のほぼ全員が臨床家としての道を志しておられる現状に大きな危惧を抱いている者の一人である。それは、医学の基本理念、つまり人間の病気を治し、防ぎ、人生を健康に生き続けていく為に必要な対策の実施が、現在のように、あるいはこれまでのように、「病気になったら病院に行って治療して貰う」という理念ですまされることは、その実績のおそらく三分の一以下のことであって、その小さい分野に医学部の卒業者の九割以上が殺到している現状には、社会の一員として極めて遺憾だとかねてより考えて来た。

そういう私も大学の医学部を卒業してから五十年あまりだったが、当時の医学部で教育を受けているうちに、当時の医学が患者の方々に対して施しうる治療法の限界に深い嘆きと悲しみをひそかに抱きつつ医師となった。しかし、当時の私たちを迎えてくれたのは、第二次世界大戦の勃発であり、私はその後の六年間を海軍の軍医として、水兵さんはもとより、南アジアの沢山の人の怪我や病気の治療に多忙を極めた約六年を過ごした。

その頃の私たち若者の多くが肺結核でたおれ、その治療に有効な方法はなかった。あるいは不治の病とされていた。日本はもとより、熱帯地方のおびただしい数の人々がマラリアで苦しみ、死んでいた。日本でも、奄美、沖縄の全住民をはじめ、百万人をこえる人々がフィラリア病にかかり、発熱や乳び尿や象皮病にかかっていても、どうにも防ぎよう、治しようがなかった。だから、私は大学を卒業したら臨床医になるより、これらの不治難病を少しでも防ぎ、治しうる道を研究する基礎医学者になろうと決心して、東京大学伝染病研究所の長谷川秀治先生の研究室に入れて戴いた。先生は当時タマサキツヅラフジという植物の含有するアルカロイドなどを使って結核の化学療法剤を開発しようという夢を持っておられた。

だが、結果からみると、私はいきなり基礎医学者とならず、六年間を軍医として外科や内科の臨床医としての経験を積んだことが良かったことになる。九死に一生を得て再び伝染病の研究所に戻った後、長靴をはいて、マラリア、フィラリア病、つづが虫病などの風土病地帯を訪れ、なぜその地域の自然環境が地域の人々にこのような風土病をはびこらしているのか、その駆除や予防や治療にはどうしたらよいか、同僚たちと一緒に木賃宿に泊ったり、野宿したりして考え、東京の研究所に戻っては予防や治療に必要な動物実験をくりかえしておよそ二十年あまりを過ごした。

その結果は率直に言って、私の期待したよりはるかに好成績もたらされた。沖縄南部の八重山群島では、当時人口三万人あまりに対して、マラリア患者年間六千人、死者千八百人という悲惨な地獄の島々といわれたものが、米軍政府の協力を得て、かなりの費用をかけてDDT屋内噴霧という方式を試みたところ、一九六〇年代にはマラリア患者がゼロとなり今日に及んでいる。日本の南部に多く、とくに奄美から沖縄にかけ

て百万人以上もいたバンクロフト糸状虫病の流行地でも、一九六〇年から五年あまりかけて、全住民の集団検血、陽性者へのスパトニンという新しい化学療法剤の集団投与、媒介蚊の駆除などの作業を厚生省と各県予算で実施して戴いたところ、一九七〇年代からは日本全域から保虫者ゼロ、新しい患者ゼロという実績が得られ、今日に及んでいる。もし私をはじめ当時の協力医師の方々が病院で臨床医であったなら、現在でも八重山のマラリアはなくなり、南日本のフィラリア病もなくなっていないであろう。また、つつが虫病はかつては新潟、山形、秋田の三県の、川の縁の草原に入った人々がかかり、半数近くが死亡していたものが、私たちの調査でこの類のダニは日本全国、いや東南アジア諸国にも広く分布し、その何十倍、何百倍という患者が発生していること、その治療にテトラサイクリン系などの抗生物質がよく効き、診断さえつけば確実に治療しうることが分かった。

以上はほんの数例の引用であるが、医学部卒業生たちによせる社会の期待は臨床医学の世界のほかにも、基礎医学、予防医学、厚生行政など大変に広いし、その成果も大きい。どうか卒業生諸君は、このような広い分野に散って人類社会の健康と福祉に貢献してほしい。

ささ・まなぶ 特別会員

医療法人社団 笑福クリニックとは

富山医科薬科大学にお世話になってから、富山の四季や人間性が気に入って、永住と考えていた矢先、黒部川に隣接する黒部市に21世紀を展望した、高齢者を中心とした福祉、医療、健康、生き甲斐、学習を目指したウイングワールド笑福学園構想に協力を要請され、医療法人社団 笑福クリニックの理事長に就任することになりました。

平成7年6月1日よりオープンし、富山医科薬科大学を中心とする若い医師の皆さんの協力を得ながら、笑いや音楽や心のケア等を取り入れた、明るく笑顔を大切に患者に接するクリニックづくりにと微力ながら努力をしております。

今後急速に増えつづける高齢者には、安心して身を寄せることの出来る総合的な安らぎの場所ではなかろうかと考え、笑福クリニックで夢を追いながら日々を過ごしています。お蔭様にて笑福クリニックも段々と地域に根ざして来ていることを報告しておきます。

佐々学記

